

学位論文要旨

青年期中期における交友関係が自我発達に及ぼす影響に  
関する心理学的研究  
—居場所におけるナナメの関係に着目して—

広島大学大学院教育学研究科

学習開発専攻

枝廣 和憲

## 目 次

### 第 1 章 本研究の背景と目的

第 1 節 本研究の背景

第 2 節 本研究の目的

### 第 2 章 青年期中期の交友関係における同年の友人関係とナナメの関係

第 1 節 青年期中期における交友関係の探索的調査（研究 1）

第 2 節 青年期中期における交友関係の質的差異に関する研究（研究 2）

第 3 節 青年期中期の交友関係についての居場所におけるエスノグラフィによる  
質的検討（研究 3）

### 第 3 章 青年期中期における交友関係が自我発達に及ぼす影響

第 1 節 青年期中期における交友関係が自我発達上の危機状態に及ぼす影響  
（研究 4）

第 2 節 青年期中期における交友関係が未来に対する時間的展望に及ぼす影響  
（研究 5）

第 3 節 青年期中期における交友関係が自我発達に及ぼす影響の質的検討  
（研究 6）

### 第 4 章 総括

第 1 節 総合考察

第 2 節 教育的示唆

第 3 節 今後の課題

引用文献

業績一覧

## 第1章 本研究の背景と目的

### 第1節 本研究の背景

#### 第1項 青年期中期の自我発達

Havighurst(1953)によれば、青年期に起こる第二次性徴という急激な身体発達により、それまで青年が抱えていた自己像が大きく揺れ、青年は「自分自身がどうい人物なのか」「自分らしさとは何か」を求めるとされている。この時期を特に、青年期中期は、決定的な転換の1つの時期であり、衝動要素と自我機能の漸進的な段階的配置とを統合するという特色を持つとされている(Blos, 1962)。このように青年期中期には、自我発達が重要な課題としてあり、その過程で葛藤が顕在化しやすい。このような状態を長尾(1989)は「青年期の自我発達上の危機状態」とした。

自我発達の危機状態として、「同一性拡散症状群」があり、①同一性意識の過剰、②選択の回避と麻痺、③対人的距離の失調、④時間的展望の拡散、⑤勤勉さの拡散、⑥否定的同一性の選択である(小此木, 1974)。この同一性拡散の概念にも含まれているが、Erikson(1968)も同一性の危機に伴って「時間的展望 対時間的展望の拡散」が顕在化するとしており、自我発達における時間的展望の役割を重視している。なかでも、自我発達において未来に対する時間的展望が重視されている。都筑・白井(2007)は、未来の自分や目標・出来事を思いうかべ、その実現を期待したり、希望することを通じて、自我同一性を達成するとしている。西平(1979)はこの未来に対する時間的展望が否定的になると自我同一性の拡散が生じることを示し、都築(1994)は同一性拡散にあると未来を否定的に捉えることを示している。

#### 第2項 青年期中期の交友関係

交友関係の質的な側面に着目した研究として、落合・佐藤(1996)は、青年期の初期では「広い範囲の友達と浅く関わるつき合い方」をしているが、後期には「狭い範囲の友達と深く関わるつき合い方」をするようになる。しかし一方で、「狭い範囲の友達と深く関わるつき合い方」が増加していくという変化が示されているとはいえ、他の関係がなくなってしまうわけではなく、「狭い範囲の友達と深く関わるつき合い方」のような友人関係に依存し密着したつき合い方をすることが必ずしも成熟した人間関係であるとはいえない(落合・佐藤, 1996; 長沼・落合, 1998)。つまり、青年期中期には「狭く深い」友人と、それ以外の「広い浅い」友人と両方の友人関係を通して、青年期中期の友人関係は変化していくといえる。

友人関係の具体的内容の発達的变化に着目した研究に、榎本(2003)がある。高校生の友人関係については次の点が示されている。活動的側面は、男子は友人と遊ぶ関係の「共有活動」からお互いを尊重する「相互理解活動」へと変化し、女子は友人との類似性に重点をおいた「親密確認活動」から他者を入れない絆を持つ「閉鎖的活動」へと変化し、その後男女とも発達的变化の最終段階である「相互理解活動」へ変化する。感情的側面は、すべての学校段階において男子では「独立」が、女子では「信頼・安定」が一定して高い。欲求的側面は、互いの相違点を理解し互いに認め合うことを望む「相互尊重欲求」が学校段階とともに高くなる欲求であると示した。さらにこの「相互尊重欲求」は「相互理解活動」と強く関連するとした。つまり、青年期において友人関係の具体的内容は、「相互理解活動」が増加し、同時に「相互尊重欲求」が強くなっていくといえる。

また、皆川(1980)によると、この時期の交友関係は「重要な他者(significant other)」の役割を担うとされ、この重要な他者がこの時期に親から友人へと変化する。つまり、親に代わる依存愛情欲求・同一化の相手として友人と相互依存の関係を

形成していくとされる（皆川，1980）。

以上，青年期中期の交友関係は，狭く深い交友関係を築き，それを通して異質性を受け入れることができるようになり，結果として，異質性のある友人を持つようになり，交友関係が拡大するといえる。そして，「重要な他者」としての友人が青年の心理に影響を及ぼすのである。この友人関係に影響を受ける心理に自我発達があり，次項でその関連について概観する。

### 第3項 青年期中期の交友関係と自我発達

自我発達の中核をなす自我同一性は，Erikson (1959)が“自我同一性の感覚とは，自分の内的同一性と連続性を維持する個人の能力が，他者にとっての自分の意味の，同一性と連続性によって，ふさわしいとされて生じた自信”というように，他者との関係，特に重要な他者との関わりを通じて形成されていく。前述したように，青年期中期にはその対象が，親から友人へと移行していく。

実証的研究として，長尾(1999)は「親密性」「心理的距離」などからなる交友関係尺度を作成し，それと自我発達上の危機状態との関連があることを示している。さらに，危機状態を規定する，①自我の強さの程度，②ライフイベント衝撃度，③現在の交友関係(友人関係)のあり方，④現在の家族関係のあり方，⑤前思春期のチャムの有無，⑥幼児期の親子関係のあり方の6要因を取り上げ，その中でどれが最も自我発達上の危機状態に影響を及ぼしているかを検討し，その結果，自我の強さの程度に次いで現在の交友関係(友人関係)のあり方が影響を及ぼしていることを示している。また，宮下・渡辺(1992)は，友人・父親・母親・教師に対する対人関係のうち，その中でどれが最も青年期の自我同一性に影響を及ぼしているかを検討し，女子の場合は友人との対人関係がもっとも影響を及ぼしており，男子の場合は教師や父親に次いで友人が影響を及ぼすことを示している。

時間的展望と友人関係との関連を扱ったものは数少ないが，柏尾(1998)があり，友人関係と時間的展望との関連を検討し，その結果，未来に対する時間的展望と友人関係が現在や過去に対する時間的展望より関連が強いことを示している。以上から，自我発達と交友関係とは密接に関連していることがわかる。

第2項で触れたが，青年期中期の交友関係は，異質性のある友人を持つようになり，交友関係が拡大する。また，重要な他者もこの時期に親から友人へと移行するとされている。これに関し，都筑(2004)は，「このような人になりたい」という人間の存在が青年の希望の形成に寄与し，そうした他者との時間の共有が青年の自己形成を促すとしている(都筑，2004)。また，小山・中原(2006)も「モデルとなる他者」を持つことが可能自己の獲得に結び付くと指摘している。これらのことより，青年期中期の交友関係には同年輩の友人だけでなく，年上の存在が含まれていることが推察される。同様に，重要な他者についても，この時期の対象が親から友人へと移行するとされていることから，この移行に際して，親と友人の中間的な人間が存在する可能性が高い。

これに関連して，笠原(1977)は，この時期の重要な関係性として，「斜めの関係」を挙げている。笠原は「「唯一の」治療的通路は，上下的タテ軸的，直系的な関係から離れた「中立的関係」としての，「斜めの関係」である」とし，その代表として「叔父一甥」関係を挙げている。つまり，タテ軸に位置する親や教師といった指導的な立場とヨコ軸に位置する同輩友人の中間に位置する，“間”の関係性である。豊嶋(2004)は不登校支援サポーターの実践の視点から，大学生と中学生の関わりから，笠原の「斜めの関係」を捉えなおしており，血縁関係ではなく，年齢差と地位的標高差による「斜めの関係」が成立するとしている。豊嶋(2004)によると，“縦”とは組織・集団・関係における権利義務文脈での垂直的地位差に基づく関係性である。

そこでは、上位者と下位者の双方が、支配し・服従する、指導し・指導される、リードし・される、保護養育し・される関係性にあり、"横"とは権利義務文脈における地位差がなく、一過的に地位差が生じたとしても、地位差の平準化が正当と双方が認知する関係であるとしている。本研究においては、年齢差があるが地位的標高差の平準化が正当と双方が認知する関係、つまり、異年齢間(年上)の友人的関係を「ナナメの関係」とする。そのほか、「ナナメの関係」について論考したものとして、中根(1967)、梶田(1995)、吉村(1998)などがあり、それぞれ「ナナメの関係」の重要性を指摘している。

以上のことから、青年期中期の交友関係と自我発達との関連を検討するには、「ナナメの関係」を含めた検討の必要性がある。

#### 第4項 青年期中期の居場所における交友関係と自我発達

筆者は青年期中期、主として高校生年代の居場所づくりに6年間携わってきた。そこでは、前述したような「ナナメの関係」を含む交友関係が多く見られた。一方、学校における集団は、基本的に同年齢集団が中心であり、また、異学年に関しては、先輩後輩という地位標高差がある関係になると考えられる。これに対して、青年期にある年齢差のある人々が出会い、地位標高差を考慮することなく、関係を維持することを意図して設置されている機関が「居場所」と考えられる。

心理学的立場から居場所の内容を論考したものとして、北山(1992)があり、居場所を、「自分」を成立するための外的要因であるとした。都筑(1998)は実践現場の報告等をもとに、居場所は物理的な場所と安心した心理状態の両方を含んだものであり、そこでは他者とのつながりが存在しているとしている。このように、居場所において「関係性」を重視しているものが多い(荻原, 1997; 住田, 2004 など)。特に田中(2002)は居場所を関係性の中で自分の位置と将来の方向性をその時々で確認できる場としている。

居場所と自我発達の関連を論じたものとしては荻野(2013)や小沢(2000)などがある。実証的な研究の数は少ないが、杉本・庄司(2006)は、大学生を対象として、現在の「居場所環境」の有無による、自我発達を検討している。その結果、現在の「居場所環境」については、「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」の3種類の居場所を同時に持っていることが自我同一性の獲得に重要であることを示している。また、吉川・栗村(2013)は、大学生の「アイデンティティ」の確立にどのように居場所が関係しているのかを検討している。その結果、「受容される居場所」と「成長できる居場所」といった他者との親密な交流のある居場所がアイデンティティの確立に関係していることを示している。しかし、両者とも居場所における「関係性」を重要視しているが、「友だち」あるいは「他者」といった具体的にどのような対象との関わりが自我発達に影響を及ぼしているか明らかにはされていない。

### 第2節 本研究の目的

#### 第1項 先行研究の課題

これまで概観してきたように、友人関係に関する研究はいずれも、「友人関係がどのような関係であるか」という関係性を扱った研究であり、「どんな友人と付き合っているか」という友人関係の対象、つまり友人を同性かつ同年輩に限定して扱っている。友人関係の発達において青年期中期は異質性を受け入れていく段階であり、年齢が異なろうとも友人となりうると推測できる。また、友人が同性かつ同年(同学年)である場合と、友人が異性である場合あるいは年齢が異なる場合との友人関係がまったく同質であるとは考えられない。さらに、自我発達や時間的展望に及ぼ

す影響も同様のことが言える。しかし、これまでの研究では、友人関係の対象が同年輩に限定されており、異性あるいは年齢の異なる友人がどの程度存在するのかを明らかにする必要がある。さらに、同年の友人と年齢が異なる友人による自我発達や時間的展望への影響の相違も検討を行う必要がある。

## 第2項 本研究の目的

本研究では、以上のような課題を検討するために、以下の2つの目的を設定した。第一の目的は、青年期中期の交友関係において、同年の友人関係とナナメの関係が交友関係のなかにどの程度存在するのか、また、関係性の質的差異はどのようなものなのかを明らかにすることである。そのため、研究1では、青年期中期の高校生に対して、質問紙調査を行い、ナナメの関係を含めた交友関係を明らかにする。次に、研究2では、友人関係の質に関する質問紙調査を行い、同年の友人関係とナナメの関係との質的差異の比較検討を行う。続いて、研究3において、ナナメの関係の多くみられる居場所において、ナナメの関係の様態を検討する。

第二の目的は、青年期中期の交友関係において、年齢差別にみた、自我発達に及ぼす影響の差異を明らかにすることである。そのため、まず研究4では、青年期中期におけるナナメの関係を含めた交友関係が自我発達上の危機状態に及ぼす影響について検討する。次に、研究5では、青年期中期におけるナナメの関係を含めた交友関係が未来に対する時間的展望に及ぼす影響について検討を行う。続いて、研究6では、研究4および研究5で検討した青年期中期におけるナナメの関係の自我発達への影響について、青年期中期に居場所においてナナメの関係を経験した者に対し、インタビュー調査を行い、その内容の詳細の検討を行う。

## 第2章 青年期中期の交友関係における同年の友人関係とナナメの関係

### 第1節 青年期中期における交友関係の探索的調査（研究1）

**目的** 研究1では、青年期中期における異年齢間の友人的関係、特に年上の友人との関係が一般にどの程度存在するのかを明らかにすることを目的とした。

**方法** **調査協力者** 私立高等学校生 270名のうち、回答に不備のなかった251名を分析の対象とした。251名の内訳は、男子92名、女子159名、年齢15～18歳、平均16.69歳( $SD: .962$ )であった。**調査時期** 2006年10月～11月

**手続き** 副校長宛に郵送し、主に担任教諭がクラスごとに一斉に実施した。回収は同様にクラスごとに担任教諭がおこなったのち、郵送により筆者が回収した。**調査材料** (1)フェイス・シート調査協力者の年齢・学年・性別を求めた。(2)分類ごとの友人数についての調査 回答は、友人の人数の記入を分類ごとに求めた。友人については、その友人が男性か女性か、年齢差、学内か学外かを基準に12カテゴリーに分類した。

### 結果と考察

#### 1) 分類ごとの友人数

本研究の結果では、同年(同学年)の友人を持つ高校生は、年上の友人を持つ者と比較して多かった。さらに、「同年」「1～2歳年上」「3～5歳年上」「6歳以上年上」の友人の順に、その友人を持っている高校生が減っていく傾向にあった。これはこれまで「同年輩の友人」を前提に行われてきた研究を裏付けるものである。しかし、6割の高校生が「1～2歳年上」の友人を持っているという結果は、「同年輩」のなかに1～2歳年上が含まれていることを示した。異性の友人について、同年では半数近くの高校生が異性の友人を持っていた。さらに異性の場合でももっとも比率の少ない「6歳以上」の友人も3割の高校生がいることを示した。つまり、現在の高校生

の友人関係には異性の友人も存在していることを示した。

## 2) 分類ごとの友人数に及ぼす、学年・性別の影響

本研究の結果では、「学外における1~2歳年上の友人」について、異性の友人を男子より女子が多く持っており、逆に同性の友人を男子が女子より多く持っていた。異性友人に対する感情の研究で、男性から女性友人に対して「頼りたい」や「尊敬されたい」という感情がみられるのに対して、女性から男性友人に対して、「甘えたい」や「頼りたい」という感情がみられた結果から性役割観の存在が示されている(山本, 1986)。この結果も、両者の「頼りたい 対 頼られたい」という感情から、女性のほうが頼りがいのある年上の異性の友人の数が増加したものと考える。

### 第2節 青年期中期における交友関係の質的差異に関する研究(研究2)

**目的** 研究2では、研究1の知見に基づき、青年期中期の交友関係において、同年輩の友人関係とナナメの関係の質的差異を検討することを目的とした。

**方法 調査協力者** 私立高等学校生 270名のうち、回答に不備のなかった251名を分析の対象とした。251名の内訳は、男子92名、女子159名、年齢15~18歳、平均16.69歳( $SD: .962$ )であった。**調査時期** 2006年10月~11月 **手続き** 副校長宛に郵送し、主に担任教諭がクラスごとに一斉に実施した。回収は同様にクラスごとに担任教諭がおこなったのち、郵送により筆者が回収した。

**調査材料** (1)フェイス・シート 調査協力者の年齢・学年・性別を求めた。(2)同年/年上の友人との友人関係についての調査 同年と年上の2分類でおのおの、友人(もっとも親しい友人)との友人関係とその人の属性を尋ねた。回答は、性別、年齢差、職業を選択肢から選択した。友人関係の調査には、榎本(2003)の友人関係の活動的側面を捉える質問紙のうち、発達の最終段階である相互理解活動尺度(5項目)と、欲求的側面を尋ねる質問紙のうち、相互理解活動と関連の強い相互尊重欲求尺度(6項目)を用いた。

### 結果と考察

#### 1) 友人関係の友人属性

本研究の結果では、高校生の同年の友人は9割以上が同性であることが明らかにされた。友人との類似性は先行研究でも指摘されており、友人同士の90%が同じ性別であるという結果とも一致する(Kupersmidt et al., 1995)。年上の友人も同様に同性が8割の値を示している。このことから、年上の場合も性別に関して、類似性を重視している傾向がみられる。また、ほぼすべての高校生の同年の友人は、同じ高校生であった。これも類似性を求める影響と考えられる。ただし、同じ高校生でも環境の異なる学外にいる場合が約4割を占めており、榎本(2003)はこの時期に友人との関係内容が同質性から異質性へと変化し、この移行期独特の関係が存在するとしており、この移行期における同質性と異質性が入り混じったものと考えられた。これに対し、年上の友人では友人が同じ高校生であるのは4割弱にしか満たず、次いで大学生であった。現実には、学年が上がるごとに年上の高校生は少なくなるため、年上の友人に関しては職業についての類似性を重視しない傾向にあると考えられた。

#### 2) 友人関係に及ぼす、性別・学年・同年/年上の影響

本研究の結果では、相互理解活動は、同年の友人に対して有意な性差が認められていたが、年上の友人に対しても、有意な結果ではないが平均値には同様の傾向がみられていた。相互尊重欲求は、同年の友人に対しても年上の友人に対しても同様に女子のほうが男子よりも強く持っていた。榎本(2003)においても相互理解活動および相互尊重欲求には同様の性差がみられており、同年に対しても年上

に対しても、友人関係の性差は存在するものと推察された。つまり、女子の特徴である共有、協調の関係の中で、互いに求めるものが大きくなることによると考えられた。相互理解活動、相互尊重欲求ともに、同年の友人に対してのほうが、年上の友人に対してよりも高かった。これは同年の友人との友人関係がより上位の発達であると考えられた。しかし、相互理解活動や相互尊重欲求以外の側面での相違点が考えられ、年上の友人との年齢差が1～2歳の場合が多いことを含めると、同年輩においても同年か1～2歳年上かによってその関係に差があることが示唆された。

### 第3節 青年期中期における交友関係の居場所における エスノグラフィによる質的検討（研究3）

## 第3章 青年期中期における交友関係が自我発達に及ぼす影響

### 第1節 青年期中期における交友関係が自我発達上の危機状態に 及ぼす影響（研究4）

**目的** 研究1, 2および3で得られた知見に基づき、青年期中期の交友関係のうち、同年輩の友人関係とナナメの関係の及ぼす自我発達上の危機状態に及ぼす影響を検討することを目的とした。

**方法** **調査協力者** 私立高等学校生 270名のうち、回答に不備のなかった251名を分析の対象とした。251名の内訳は、男子92名、女子159名、年齢15～18歳、平均16.69歳( $SD: .962$ )であった。**調査時期** 2006年10月～11月  
**手続き** 副校長宛に郵送し、主に担任教諭がクラスごとに一斉に実施した。回収は同様にクラスごとに担任教諭がおこなったのち、郵送により筆者が回収した。**調査材料** (1)フェイス・シート 調査協力者の年齢・学年・性別を求めた。(2)分類ごとの友人数についての調査 研究1で用いた質問紙を使用した。(3)自我発達上の危機状態の調査 長尾(2005)の「青年期の自我発達上の危機状態尺度(26項目)」を用いた。

**結果と考察** 本研究の結果では男子および女子あるいは1年生～3年生いずれの場合も青年期の自我発達に「同年の友人」の人数は影響を与えていなかった。このことは、従来の研究では自我発達や自我同一性に友人関係の「あり方」のような関係が影響しており(長尾, 1999)、「同年の友人」との友人関係においては、量的なものよりも、質的な関係が影響を与えることが推察された。「学外にいる1～2歳年上」の同性友人の人数が増えると、ほぼ男女とも学年の差なく、青年期特有の葛藤がおさまり安定していた。松井(1990)のいう友人関係が青年にとって果たす機能としての、モデルに着目すると、発達的に進んでいると推察される「1～2歳年上」の友人をモデルとして学習し、あるいは、重要な他者として同一化を行うことで自我発達が促進されていると考えられた。さらに、この重要な他者の対象が親から友人へと移る時期であり、その移行期に際し、「年上の友人」というその中間に位置する存在が重要な他者としての役割を果たし、自我発達に影響を与えていると推察された。

### 第2節 青年期中期における交友関係が未来に対する時間的展望に 及ぼす影響（研究5）

**目的** 研究1, 2および3で得られた知見に基づき、青年期中期の交友関係のうち、同年輩の友人関係とナナメの関係の及ぼす未来に対する時間的展望に及ぼす影響を検討することを目的とした。

**方法** **調査協力者** 私立高等学校生 270名のうち、回答に不備のなかった



251名を分析の対象とした。251名の内訳は、男子92名、女子159名、年齢15～18歳、平均16.69歳( $SD: .962$ )であった。**調査時期** 2006年10月～11月  
**手続き** 副校長宛に郵送し、主に担任教諭がクラスごとに一斉に実施した。回収は同様にクラスごとに担任教諭がおこなったのち、郵送により筆者が回収した。**調査材料** (1)フェイス・シート 調査協力者の年齢・学年・性別を求めた。(2)分類ごとの友人数についての調査 研究1で用いた質問紙を使用した。(3)未来に対する時間的展望の調査 白井(1997)の時間的展望体験尺度のうち、未来に対する時間的展望体験尺度(「希望」を測定する4項目と「目標指向性」を測定する5項目の計9項目)を用いた。

**結果と考察** 本研究の結果では、「同年」の友人数は、未来に対する時間的展望との関連がなかった。これは研究4で示されたとおり、自我発達との関連と同様に、時間的態度の関連のある「同年」の友人関係について、量的な人数よりも質的な関係が影響していることを示唆する結果と考えられた。「学外の1～2歳年上(同性)」の友人を多く持つほど、未来に対する時間的展望が肯定的であった。生涯発達の観点から、Levin(1951)は児童期から青年期の未来に対する時間的展望の範囲が拡大するとしているが、実証的な研究によって未来に対する時間的展望の広がり範囲は拡大するが青年期に一時的に縮小することがあり、さらに関心が近い未来に向くと示されている(白井, 1997)。その近い将来にある「学外の1～2歳年上(同性)」の友人を持つことで具体的な将来展望を描きやすくなり、その結果として未来に対する時間的展望が肯定的になることが推察された。

### 第3節 青年期中期における交友関係が自我発達に及ぼす影響の質的検討(研究6)

## 第4章 総括

### 第1節 総合考察

本研究の目的は、青年期中期における交友関係が自我発達に及ぼす影響について、ナナメの関係に着目して検討することであった。

この目的を達成するために、研究1では、質問紙調査により、青年期中期における交友関係に約6割のナナメの関係を有していることが明らかにされた。特に女子は、「1～2歳年上で学外にいる友人(異性)」を多く有しており、男子は「1～2歳年上で学外にいる友人(同性)」を多く有していることが明らかにされた。研究2では、研究1で得られた知見をもとに、同年輩の友人との友人関係と、ナナメの関係との質的差異を検討した結果、相互理解活動および相互尊重欲求について同年輩の友人関係のほうが強く持っており、両者の関係性には質的な差異があることが明らかにされた。研究3では、青年期中期における交友関係を日常的な文脈から質的に検討し、青年期中期における交友関係にナナメの関係があることが示唆された。

研究4では、青年期中期における交友関係が自我発達上の危機状態に及ぼす影響について検討した結果、同年輩の友人からの影響はなく、ナナメの関係が自我発達上の危機状態を安定化させることが明らかにされた。研究5では、同様に青年期中期における交友関係が未来に対する時間的展望に及ぼす影響について検討した結果、同年輩の友人からの影響はなく、ナナメの関係が未来に対する時間的展望を肯定的にさせることが明らかにされた。研究6では、研究5および研究6で得られた知見をもとに、青年期中期においてナナメの関係を経験した社会人に対して、質的調査した結果、ナナメの関係を持つことが自我発達にポジティブな影響を及ぼしていると推察された。

また、本研究では、ナナメの関係が未来に対する時間的展望を肯定的にすることが推察された。しかし、高校生にとって1～2歳年上の存在は、必ずしも大学生とは限らない。1年生にとって1～2歳年上の存在は、高校2年生もしくは3年生の上級生である。本研究の結果では、未来に対する時間的展望に影響を及ぼしていたのは、上級生にあたる「学内にいる1～2歳年上」ではなく、「学外にいる1～2歳年上」であった。つまり、学内の上級生よりも、比較的遠い存在である、学外の年上の友人から影響を得ているということである。この時期の友人は、異質性を取り入れる時期であり、学校の違う友人を持つことが発達的な意味を持っている可能性が推察される。つまり、居場所のような異質性と触れ合う機会を設けることが、青年期中期の自我の安定や時間的展望の肯定化を促す重要な教育的支援となると考えられた。

以上のように、先行研究では、友人を同年輩に限定して取り扱って検討されてきたが、青年期中期におけるナナメの関係という視点から、自我発達に及ぼす影響について検討し、青年期中期においてナナメの関係が自我発達に対し、正の影響を及ぼすことを明らかにできた。

## 第2節 教育的示唆

本研究からは、以下の2つの教育的示唆が得られた。1点目は、異年齢交流および異校種間交流への応用である。これまで、異年齢交友の文脈から、年上が年下に関わる研究はなされているが（中出，2003など）、年下への影響を調査したものは少ない。本研究で得られた「ナナメの関係」が心的成長の一つである自我発達に適応的な効果をもたらすという結果を踏まえれば、現在同年代を中心とするピア・サポートプログラムに異年齢交流および異校種間交流などの「ナナメの関係」という視点を加えることで、新たなピア・サポートへの支援の可能性を探ることができると考えられる。また、「学内にいる1～2歳年上」であっても、同質性の高い部活動などの先輩―後輩関係ではない、モデルとして可能自己に近い存在を提供することが学内における「ナナメの関係」の視点を加えたピア・サポートが考えられる。2点目は、近年大学生のボランティアが高等学校に入る活動は多くみられている（例えば、松田，2007；下岡他，2010）。また、認定特定非営利活動法人 NPO カタリバに代表されるように、キャリア支援を目的とした活動も行われてきている。そのなかで、本研究で得られた知見は、これらの活動の実証的な裏付けをすると同時に、キャリアや進路選択に限らず、自我発達への肯定的な影響も及ぼすことが示すことができた点である。

## 第3節 今後の課題

本研究では、年上との友人関係があることが確認され、自我発達に影響を及ぼす、同年との友人関係の側面と年上との友人関係の側面が異なることが明らかにされた。しかし、どのような友人関係の側面が関連しているかは明らかにされなかった。年上の友人の存在が確認され、その友人数が自我発達などの心理的側面と関連があることが認められた以上、年上の友人との友人関係がどのようなものであるかを調査し、年上の友人との友人関係を測る尺度を作成し、それを以って心理的側面との関連を検討する必要がある。

## 文献

- Blos, P. (1962). *On adolescence : A psychoanalytic interpretation*. New York : The Free Press.
- 榎本淳子 (2003). 青年期の友人関係の発達的变化—友人関係における活動・感情・欲求と適応— 風間書房
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York : Norton.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity : Youth and Crisis*. New York : Norton.
- Havighurst, R. J. (1952). *Developmental tasks and Education* : Longmans.
- 萩原建次郎(1997). 若者にとっての「居場所」の意味 日本社会教育学会紀要, **33**, 37-44.
- 石本雄真(2009). 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 **3**(1), 93-100
- 梶田正巳(1995). 成長への人間的かかわり—心理学・教育学的アプローチ 有斐閣
- 笠原嘉(1977). 青年期—精神病理学から— 中央公論社 中公新書
- 柏尾眞津子 (1998). 青年の友人関係と時間的展望との関連 社会学・心理学研究(関西大学大学院人間科学), **49**, 139-149.
- 北山修(1992). 移行期としての思春期—自分をかたちづくる年頃 こころの科学, **44**, 38-43
- 小山憲一郎・中原睦美 (2006). 進路選択に対する自己効力に及ぼす影響—文系学部, 医学系学部 3年生を対象に— 日本心理臨床学会第 25 回大会発表論文集, 300
- Kupersmidt, J. P., DeRosier, M. E. & Patterson, C. P. (1995). Similarity as the basis for children's friendship : The roles of sociometric status, aggressive and withdrawn behavior, academic achievement and demographic characteristics. *Journal of Social and Personal Relationships*, **12**, 439-452. (榎本淳子(訳)(2003). 青年期の友人関係の発達的变化—友人関係における活動・感情・欲求と適応— 風間書房, 8-9)
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science*. New York : Harper & Row.
- 松田文子 (2007). 大学生によるピア・サポート・プログラムの効果(1) 福山大学こころの健康相談室紀要, **1**, 20-27.
- 松井豊 (1990). 青年期における友人関係 斎藤耕二・菊池章夫(編著) 社会化の心理学ハンドブック—人間形成と社会と文化— 川島書店
- 皆川邦直 (1980). 青春期・青年期の精神分析的発達論—ピーター・ブロスの研究をめぐって— 小此木啓吾(編) 青年の精神病理 **2** 弘文堂 pp43-66.
- 宮下一博・渡辺朝子 (1992). 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部研究紀要, 第 1 部, **40**, 107-111.
- 中出佳操(2003). 大学生によるピア・サポート活動とその意義 人間福祉研究 **6**, 85-99
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, **10**, 35-47.
- 長尾博 (1989). 青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み 教育心理学研究, **37**, 71-77

- 長尾博 (1999). 青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因 教育心理学研究, **47(2)**, 141-149.
- 長尾博 (2005). 青年期の自我発達上の危機状態に関する研究 ナカニシヤ出版
- 中根千枝(1967). タテ社会の人間関係 講談社
- 西平直喜 (1979). 青年期における発達の特徴と教育 青年期発達段階と教育, **3**, 13-22.
- 能智正博(2011). 臨床心理学をまなぶ 6 質的研究法 東京大学出版会
- 荻野杏菜(2013). キャンプに参加する青少年の「居場所」概念とアイデンティティとの関連に関する考察 -在米日本人を対象としたキャンプでの調査結果から- 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊 **20(2)**, 69-79
- 小此木啓吾 (1974). 解説:モラトリアムとアイデンティティ拡散 小此木啓吾(編) アイデンティティ—社会変動と存在感の危機—(現代のエスプリ, No.78) 至文堂
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, **44** (1), 11-22.
- 小沢一仁(2000). 自己理解・アイデンティティ・居場所 東京工芸大学工学部紀要. 人文・社会編 **23(2)**, 94-106
- 下岡輝也・小手川雄一・岡崎善弘・松田文子 (2010). 大学生による中学生へのピア・サポートプログラムの効果 **4** 福山大学こころの健康相談室紀要 **2**, 51-58
- 白井利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 杉本希映・庄司一子(2006) 大学生の「居場所環境」と自我同一性との関連--現在と過去の「居場所環境」に対する認知との比較を中心として 筑波教育学研究 (4), 83-101
- Sullivan, H. S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. London : Routledge.
- 住田正樹(2004). 子どもの居場所と臨床教育社会学 教育社会学研究, **74**, 93-109.
- 田中治彦(2002). 子ども・若者の「居場所」の構想 更正保護, **53**, 6-11.
- 都筑学 (1994). 自我同一性地位による時間的展望の差異—梯子評定法を用いた人生のイメージについての検討— 青年心理学研究, **6** , 12-18.
- 都筑学(1998). キャンパスにおける大学生の居場所—郊外型のマンモス私大における分析— 日本青年心理学会第6回大会発表論文集, 36-37.
- 都筑学(2004). 進級・進学にともなう小中学生の意識変化の検討 教育学論集(中央人学), **46**, 45-59.
- 都筑学・白井利明(2007). 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版
- 豊嶋秋彦(2004). 教員養成学の構造からみた不登校生のサポートと「斜めの関係」—対人専門職への社会化研究の実践的理論的意味— 弘前大学教育学部紀要 教員養成学特集号, 27-42
- 山本真理子 (1986). 友情の構造 人文学報(東京都立大学人文学部), **183**, 77-101
- 吉川満典・栗村昭子(2013). 大学生におけるアイデンティティの確立について—心理的居場所との関係から 総合福祉科学研究(4), 35-41
- 吉村順子(1998). 教育環境における斜めモデルの提唱 金沢経済大学論集 **32(1)**, 83-95